

中近東フィールド・ノート② 学生達のルーツと教育

高橋 清 (技術部)

応用地質学センターの学生

応用地質学センターの修士課程は創立時の第1 2回生は鉱物資源系 (Mineral Resources) のみであったが1973年の第3回生より水利地質系 (Hydrogeology) が1974年の第4回生より地質工学系 (Engineering Geology) が新設され現在に至っている。なお サウジアラビア政府高等教育省 (1975年に新設) より近い将来に石油地質系 (Petroleum Geology) と海洋地質系 (Marine Geology) の増設が要望されている。

鉱物資源系に登録された第1 2回生36名のうち最終的に修士の学位を得たのは半数の18名に過ぎなかったが第3 4回生については16名中12名が修士を得ている。さきに述べたようにセンター創立に当って石油鉱物資源省ではヤamani大臣と鉱物資源担当のカバニ次官は積極的に協力を約束し 鉱物資源局の40歳以下の大学卒の地質家・鉱床家で修士や博士の学位をもたない26名全員を第1回の学生として送りこんできた。また第2回生も同様に鉱物資源局の新卒入省者5名と欧米からの研修帰りの5名計10名が登録された。結果的には修士を与えられた18名のうち大学卒業後3年以内のものが80%以上の15名を占め 30歳以上で大学卒業後5年以上は12名中2名にすぎず 実務経験の長い年長の連中は厳し

い再勉学に堪えられなかったようである。第3回生以降は 新入生の応募登録も軌道に乗りほとんどの学生は新卒の若い連中となり 第1 2回生にみられたトラブルはなくなった。センターへの新入生の登録は 普通12月に行われ新学期は1月から始まる。サウジアラビアの大学の卒業は米国式に “春セミスター” の終わった6月に行われるが 政府人事庁 (Bureau of Personnel) では全卒業生を登録 就職・進学が決まる12月まで拘束し国内・国外で行われる各種の研修に参加させる。サウジアラビアでは高等教育まですべて国費でまかなわれこのため卒業生は政府に奉仕する義務があり 多くの大学卒業生は各地の高校・中学の教師として散ってゆく。一部の卒業生は公務員として各省庁に配属される。センターへ登録される学生の大半は各省庁から派遣されるので 新学期を1月にせざるを得なかったわけである。しかしサウジアラビア国籍を持たないセンター入学希望者は 卒業後6月から12月まで待たねばならず そのため9月から始まる英米の大学の大学院へ待ちくたびれて進む者も多いといわれている。

表でみられるようにセンターに登録された学生の出身大学はエジプトほかのアラブ圏の大学 アメリカの大学など多岐にわたっている。しかし “石油危機” 以後

サウジアラビア国内の三大学—リヤド大学 石油鉱山大学 アブドル・アジーズ王大学—の充実は著しく進学希望者の大半は国内の大学に進み 一部の医学や建築志望の学生が欧米に出かけるにすぎなくなっている。

学生の語学力

私と一緒に赴任した オランダ人の地球物理学専門家のマイネ博士 (Dr. Max Mijne) は奥さんはドイツ人 お母さんはインドネシア人で 英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・インドネシア語を実によく話し 日本語でも挨拶程度はできる。高校までジャワ島バンドンで過ごし 第二次世界大戦中家族とともに日本軍に抑留されていたという。ア

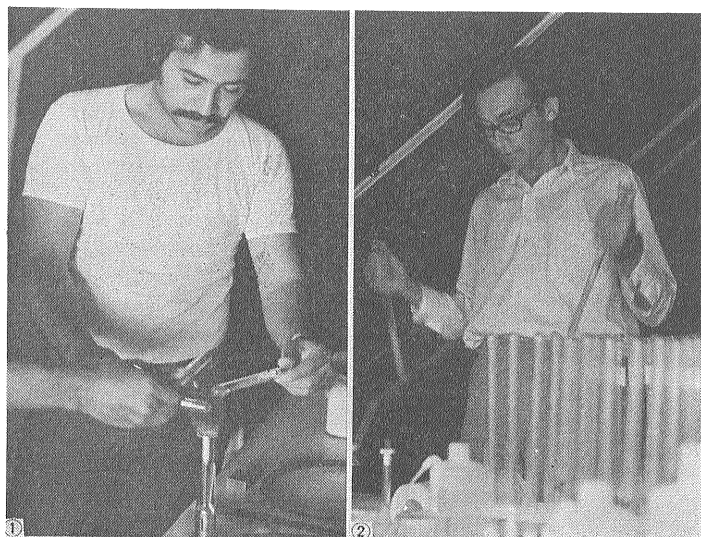


写真1・2 フィールドに設置された地化探ラボで比色分析で 銅・鉛・亜鉛の分析をしているブカリの学生達 ファルーク・ブカリ君とアリアス・クーカンディ君

第1表 応用地質学センターの登録学生数と修士獲得者数

学生の出身大学	国名	第1回生	第2回生	第3回生	第4回生	第5回生	第6回生
		1970—74	1971—75	1973—76	1974—77	1975—	1976—
リヤド大学 石油鉱山大学 (UPM)	サウジアラビア	名 13 → ⑧	名 4 → ①	名 2 → ②	名 3 → ③	名 7 →	名 6 →
		(1973年地質系初卒業生を生む)				名 2 → ②	名 2 →
カイロ大学 アイシヤムス大学	エジプト	4 → ② 2 → 0	2 → 0 1 → 0		1 → 0 1 → 0	1 →	1 →
ペイルートアメリカ大学 (AUB)	レバノン	1 → ①				1 →	1 →
ダマスカス大学	シリア	1 → ①					
リビア大学	リビア	1 → 0					
クウェート大学	クウェート						
米国の諸大学 その他	主として州立大学	4 → ②	3 → ③	2 → ① 1 → 0	1 → ①	1 →	2 →
		26 → ⑭*	10 → ④	8 → ⑥	8 → ⑥	13 →	14 →

* サウジアラビア・国立アブドル・アジーズ王大学の地質系初卒業生は1978年6月に生れ 第8回生として一部登録の予定

** 26 → ⑭=修士獲得者数

⑭
登録学生数

ルコールが入ると 「見よ東海の空明けて……」と愛国行進曲をうたいはじめる。彼に「なぜオランダ人は外国語をうまく話すのか」ときいたところ 「外国人はだれもオランダ語をわかろうとしてくれないからね」とあっさり答えてくれた。

外国人のほとんどが日本語をわかろうとしてくれない点では 日本の事情はオランダ以上であろう。オランダの大半の科学者が外国語を不自由なく「書き話す」のにくらべて 日本の場合は未だ「話す」方で大いに遅れをとっているように思われる。今日の日本の科学はすでに世界的水準に達しており 日本の科学者は外国語を「読んで」知識を吸収する段階から 「書き話して」発表



写真3 メッカ出身で祖父母がインドネシアから移住してきたサウジアラビア人学生ザカリヤ・ファタニ君とマキ・アブドルアジス君



写真4 フィールドの週末は学生達が自慢の料理をつくってくれるので楽しみだ。メッカ出身の連中がメッカの郷土料理「まんとう」(饅頭)を作ったのには驚いた。「中国人回教徒が巡礼に来てメッカにのこしていったものだろう」といっても学生達は信じなかった。「肉まん」そのもので肉は羊の肉 「まんとう」と発音し さきはちゃんと呼びねってある。この「まんとう」に米国製キetchupとインドネシアのサンバルをつけて食べた。



写真5 ジェッダの北東 200 キロの山地に住むハルブ族のアブドラハマ一家。写真にうつっているのがほぼ全財産で ほかに羊15頭 山羊30頭 犬一匹がいるだけで大変に貧しい。アブドラハマンは毎日灌漑事業の工夫にでて ダットサンピックアップトラックを買うのを楽しみにしている。女性は特有のマスクをつけ 外に出る時はさらに黒のヴェールをかぶる。

する時代に移ってきている。

もちろんもし日本語が世界で共通に理解してもらえる国語であれば 日本語で論文を書き発表すればよいが実際はそうではなく 何らかの外国語によらねばならない。科学の分野で今日もっとも広く世界中に理解されている共通語は英語である。科学者の能力が「英語を話す語学力」と平行しているとは考えていないが 「話す語学力」の欠除のためにすぐれた科学者の能力・実力の評価に大いに影響しているのは多くの例を挙げるこ



写真7 ヒジャーズ山脈南部 ジャバル・イブラヒム付近 この付近は海拔約 2,500 メートルの高原で 階段崖がみられる。ヒジャーズ・ハイウェイはこの高原を北から南に貫いている。約 9 億年の火山岩累層を貫いているジャバルイブラヒムは 石英閃緑岩々体で 6 億 8 千万年 (Rb-Sr 法) の年代を示す。ヒジャーズ・ハイウェイの開通により 人目に触れ難かったアシール地方は開発に観光に脚光を浴びつつある。



写真6 アシール地方の羊を追っている婦人 羊の毛を糸に紡ぎながら山を歩いている。ナジトやヒジャーズ北部のベドウィンの女性とくらべて大変開放的で 特有の衣裳をつけヴェールはかぶっていない。

ができる。日本語について書いてみたのは センターの学生達の英語力に大きな差があり これが学生達的能力・実力の評価に大いに影響しており 日本語もアラビア語も科学の分野では 方言に過ぎないことを痛感させられたからである。

アラビア語が最近国連の共通語として採用されたが 科学の分野でのアラビア語は日本語の場合と同様に世界

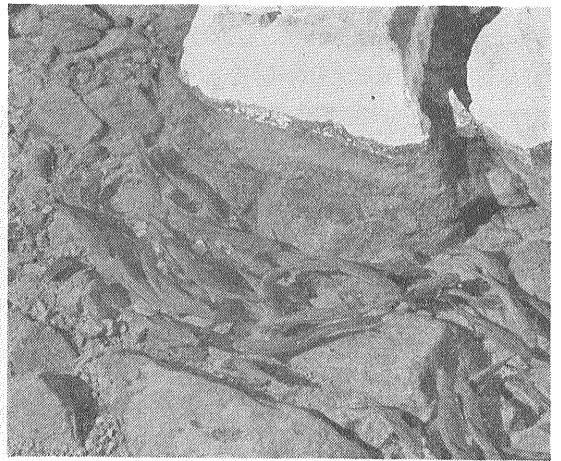


写真8 ヒジャーズ山脈やアシール地方には ワジ(溜谷)ではなく一年中水の流れる清流が各処に見られる。地元のベドウィンは病気を恐れて魚を食べないので ハゼに似た魚は小川に群をなしており 週末には学生達と魚すくいを楽しみ「からあげ」にして賞味した。しかしこれらの清流は海まで到達できず途中で消えてしまう。

的に理解される共通語では決してない。日本の場合は「理化学辞典」「地学辞典」などの用語辞典がよく普及しているが アラビア語の場合このような科学用語辞典の編纂は緒についたばかりである。大学の鉱物学のアラビア語の講義をきいたことがあるが 話している1/4程度は英語が混じり 黒板に書かれたのは英語ばかりであった。

リヤド大学やエジプトの諸大学の卒業生は学生時代講義をアラビア語で受け 一方 バイルートのAUB ダハランの石油鉱山大学 クウェート大学などでは講義は英語である。このため両者の卒業時の「書き話す語学力」の実力の差は想像以上に大きく 応用地質学センターの大半の教授たちは入学してきた学生達の素質・能力をこのために過少評価したり過大評価し 正当に判断できない例が多かった。この「語学力」の差によるハンディキャップは埋めるのに2～3年はかかっている。地質ニュース 287号で述べたように サウジアラビア高等教育省は科学に関係のある学部での講義は英語に改めることを決定し 1977/78年度から実行に移すようである。

現在 国連の共通語は 英語・フランス語・ロシア語・中国語・スペイン語で最近アラビア語が共通語として新たに認められた。しかし最も普通に広く使われているのは英語である。パリに本部のあるユネスコでは正式書類は英語とフランス語で書かれ 本部職員は英・仏両国語に堪能である必要があったが 10年程前から英語だけでフランス語のできない職員の数が増えてきた。ヨーロッパのラテン諸国(フランス・イタリア・スペイ

ン・ポルトガル)でさえ最近では相当な田舎に入っても英語が通ずるようになってきている。こと程さように最近の英語の普及率は高くなっている。

サウジアラビアの10年前は都市部を離れて地方にでかけると アラビア語ができなければ飯の食いはぐれになりかねないほど英語は通じなかったが 最近は小学校に通っているベドウィンの子供達をつかまえれば英語で日常会話が通じるので問題はない。アラビアでは小学校の3年からやさしい英語の会話を教えている。6年生ともなれば或る程度以上の会話をこなすようになっている。ただし書くことは中学校に入ってからである。このように小さい時から英語を話すことに馴れた児童・生徒が大学に進学するようになり講義が英語となれば「書き話す語学力」の問題は自然と解消されてしまうだろう。一般にアラブ圏の人々は大変おしゃべりが好きで 聞きかじりの英語やフランス語などを覚えては積極的に外国人に話しかけてくるので「話す語学力」も自然と高くなっているようである。

アラブ諸国でもモロッコ アルジェリア チュニジアのマグレブ(Maghreb)三国では旧宗主国の言葉であるフランス語が共通語であり 英語はほとんど通ぜず アラビア語は国語復活運動が起っているほど忘れられてきた。このため マグレブ三国と他のアラブ圏との交流は極めて少ない。レバノン シリアの両国でも数十年の委任統治を行ったフランスの影響で上流階級の家庭ではフランス語を話しているが 次第にフランス語は英語にとって代られつつある。



写真9
ヒジャーズ山脈からの伏流を集め大オアシスのあるビシヤの街。古くから多くの農耕奴隷がアフリカから輸入されたため ビシヤの人口の半数はアフリカ黒人系のサウジ人である。ビシヤに集った伏流水は東に流れて砂漠に消えてゆく。(ジェッダ市の南東600キロにあり イエメンアシールからの交通の要衝でもある)。

またカダフィ少佐によって1969年9月革命が成功したリビアでは ナセル主義の流れをくむアラブ民族主義を旗印に国づくりを行っている。ところが1970年後半から外国語の文字・看板が次第に見られなくなり 国際空港の出入国カードもアラビア語で記入せねばならなくなった。もちろん出入国管理官がパスポートを見ながら代りに書きこんでくれるが……。これまでの大学での公用語をみても アラブ民族主義の主張が強く叫ばれた時代—とくに1960年代の後半アラブ連合のナセル大統領全盛時代—には 外国語排斥運動が強くおこりアラビア語ですべて講義をし アラブ民族主義が弱まってくると現実的に英語で講義を始める傾向がみられる。英語をどんな時代にも問題なく取り入れてきた現実派の代表はバイルートのAUB ダハランの石油鉱山大学とクウェート大学であり アラブ民族主義の影響を強く受けているのは リビア大学 エジプトの諸大学 ダマスカス大学などである。

そしてサウジアラビアのリヤド大学は ナセル大統領時代に育ったエジプト人教授の影響を強く受けてアラビア語の講義を続けていたが これからは欧米人スタッフの導入にともなって現実派に戻ってくることであろう。

2年毎に行われているアラブ鉱物資源会議では アラビア語・英語・フランス語の同時通訳により 会議でのコミュニケーションをよくしている。

中近東の政治情勢は現在は落ち着いているが いつまた大変動がおこるか判らない準安定状態にある。アラブ諸国の大学の機構・教育方法なども 政治情勢に左右される可能性が強いが 科学教育には英語が定着しつつあるように思われる。

学生たちのルーツ

サウジアラビア生来の住民は遊牧部族民であるセム族のアラブ人である。これら生来のサウジアラビア人のほか 中近東やその他の国の回教徒で巡礼としてきてそのまま居ついた者の子孫や 中近東の近隣諸国から商工業に従事したり あるいは労働者として渡来してきた人達も多い。また かつて奴隷としてアフリカから売られてきた黒人の子孫は各地のオアシスで同化して農耕に従事しており イエメンに近いアシール地方にはソマリアやエチオピアから渡ってきた者の子孫も定着している。巡礼として居ついた者の子孫は メッカやマディナの巡礼地かその近くの都市部(ジェッダ・タイフ)に定着しており メッカにはインドネシアやマレー半島からの渡来者が多く タイフにはいわゆるブカリ(Bokhari)が多い。ブカリはソ連中央アジア イラン北部 トルコ東部 アフガニスタンなど中央アジアからの渡来者で

多くのブカリは驚くほど日本人に顔付きが似ている。ジェッダにはハデラモウト(南イエメン)出身者が圧倒的に多く 団結力が大変強く多くの者は商工業に従事している。マディナには地理的条件からか トルコ・シリア・レバノン・パレスチナなど 地中海沿岸諸国からの渡来者が多く 紅毛碧眼の人達が目立つ。

1974年暮れにサウジ政府ははじめての国勢調査を行いそれによる総人口は701万2,642人と報告されている。

総人口のうちの約500万人は メッカ ジェッダ タイフ マディナ リヤド ダンマンなどの都市部に集中し 生来の遊牧部族民のうち 現在も砂漠で羊を追っているのは200万人に満たない。

さて 応用地質学センターが1970年に創立されてから現在まで(第6回生まで) 入学登録した学生数は79名で そのうちの25%にあたる20名はサウジアラビア国籍をもっていない。内訳はパレスチナ9名 ハデラモウト(南イエメン)8名 シリア2名 スーダン1名で 中東紛争と政変で国を失ったパレスチナ人と南イエメン人が圧倒的に多い。大半のパレスチナ人達は1947年イスラエル建国以後に故郷を追われてサウジアラビアを安住の地としているが 祖国復帰を願ってサウジアラビア国籍をとらないものが多い。また南イエメン人は都市部で比較的古くから商工業に従事しているグループと 革命で国外に避難したグループに分けられる。ハデラモウト出身者は バカーネム バグシャーン バハレーバなどのように **Ba** のつく姓と サリ サクルーなど **Sa** のつく姓が特徴的でありジェッダ市のスークの商店街の看板の半数は **Ba**—か **Sa**—である。

サウジアラビア国籍をもつ59名の学生のうち祖父か父の代まで遊牧部族民であつたいわゆる地方出身者は少しづつ増えてはいるが18%の11名にすぎず 残りの80%以上はメッカ ジェッダ タイフ マディナ の都市出身者であり そのルーツを探ると近年あるいは数代前に巡礼に来てそのまま定着した回教徒の子孫が多い。もちろん第1回生のシャリフ君はフセインヨルダン国王の甥にあたるハム家末裔 アルシャイビ君はメッカカーバ神殿の鍵をあずかる古くからの名家の跡取り 第3回生のズベール君の家はメッカ4大名家の一つ(彼の兄は現アブドル・アジーズ王大学学長)の出で 旧家の出身者もいるにはいたが……。サウジアラビアではつい十数年前までは中学や高校は メッカ・ジェッダ・マディナの三都市 特にメッカ市に集中し地方在住者で子弟を進学させるためには これらの三都市に寄留させねばならなかった。地方の遊牧部族民たちのための小・中学

第2表

学 生 た ち の ル ー ツ

			数百年続いた旧家の出身	祖父母か両親が定着した家族出身	そ の 他
サウジアラビア人	メッカ出身	24名	6名	12名 (インドネシア)	6名
	マディナ出身	10名	3名	5名 (レバノン・シリア)	2名
	ジェッダ出身	6名	2名	2名 (ハデラモート)	2名
	タイフ出身	8名	2名	6名 (中央アジア)	—
	地方出身 (リヤド出身を含む)	11名	2名	0名	9名
		59名	15名	25名	19名
外国人	パレスチナ人	9名			
	南イエメン人	8名			
	シリア人	2名			
	スーダン人	1名			
計		20名			
		79名			

校や高校の建設開校が進んだのはほんのこの10年ほどのことである。このため応用地質学センターのサウジアラビア人学生の80%以上は都市出身者でありその半数はメッカ出身であることもうなづけるであろう。

紅海岸のジェッダ市から180km 海拔1,500mの高地にある避暑地タイフ市はサウジアラビアの夏の首都で国王はじめ政府関係機関は6月から9月までリヤドからタイフに移動してくる。タイフでまず驚ろかされるのは日本人そっくりの人達が沢山いることである。最初に訪れた時はつい懐しさの余り日本語で話しかけてしまった。さきに述べたようにこの人達はブカリ(Bokhari)と呼ばれ中央アジアの回教圏から巡礼にきてそのまま居ついた人々である。出身地によってトルキスタニエレバニ(アルメニア) ダクスタニ(カスピ海西岸) タシケンディ クーカンディ(アフガニスタン)などの姓をもつ。タイフ出身の学生のうち8名中6名はブカリである。タイフ市の猫達もアラビアでは珍しい毛足の長い尾のふさふさしたベルシャ猫系である。普通アラビア猫といわれているのは古代エジプトの彫像にもある耳が大きく手足やくびの長い短毛のアビシニア猫系である。かつてブカリ達が祖国から猫も連れて巡礼にはるばるやってきたのであろう。

遊牧部族民はベドウィン(英語 語源はバグダイ)と呼ばれ姓には部族の名を取って付けられている。ウタイバ(Utaybah)部族出身者はウタイビ ハルブ族(Harb)出身者はハルビー ガハタン族(Qahtan)出身者はガハタニというように、また外から移住して居ついた人達もブカリ以外にバグダディ(Baghdadi)―バクダッドから来た人―とか ヒンディ(Hindi)―インドから来た人(ヒンズー教徒)―などが多く有名なクルド族の出はクルディでマディナに多い。

第2回生で現在博士課程の学生であるモハメッド・アリアス・クーカンディ君は姓からブカリであることが判り ミドル・ネ

ームのアリアスはお父さんの名前である。第2回生にはモハメッドが多かったためそしてアリアスが比較的珍しい名だったため 通称「アリアス」と呼ばれていた。彼の家族はアリアスが10歳の時アフガニスタン北部の寒村から巡礼に来てタイフに居つき アリアスはアラビア語を全く知らなかったため大分おくれで25歳で高校を卒業してリヤド大学に進んだ“おくて”である。アリアスの家庭は大変貧しかったが奨学金により大学を卒業し 大学在学中にサウジアラビア国籍を取得している。このように学生達の名前から大よそのルーツが判るわけである。

センターの学生79名の中 59名がサウジアラビア国籍でさらにそのうちの15名がサウジアラビアで旧家あるいは名家といわれ何代も続いている家系の出身で 比率にすると2割に満たない。アリアス・クーカンディ君のように貧しい移住者の子弟でも努力して良い成績をとれば どんどん進路が開け出世できる。もちろん 名家の子弟は古くからの人間関係から 一般庶民の子弟達よりも進学や出世は比較的容易であることは否定しないがサウジアラビアでは進学や出世の門戸があらゆる階層の国民に開かれている。日本人であるわれわれはこの事実は当然のことと受け止めて驚かないが ヨーロッパとくに英 仏 独から来た連中には 大変な平等主義にみえるようである。

サウジアラビアの遊牧民

ベドウィンと呼ばれているサウジアラビアの遊牧部族民は 1974年末に行われた第一回の国勢調査の結果から200万人足らずと推定されている。同じベドウィンでもナジド ヒジャーズ北部のベドウィンと ヒジャーズ

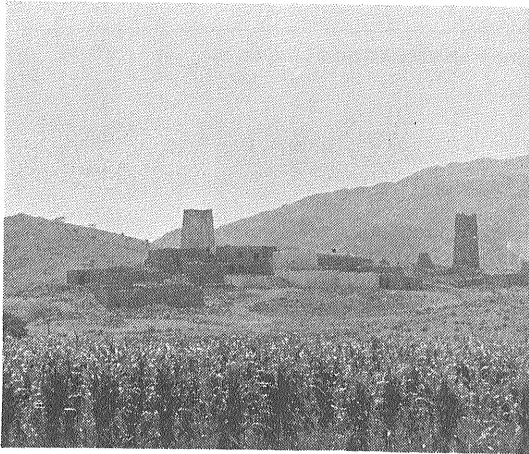


写真10 アシール地方の農村ドマの中心部

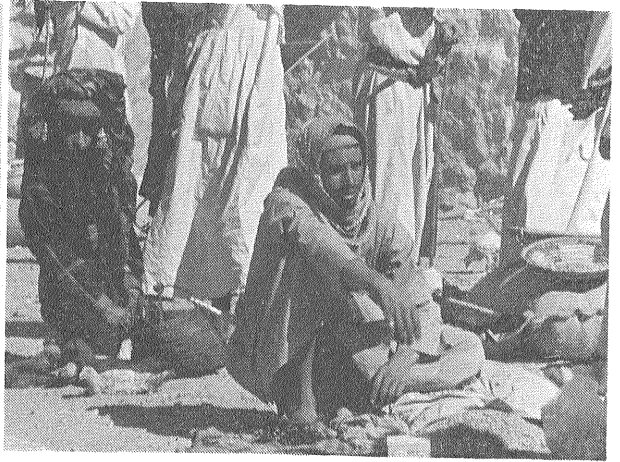


写真11 アシール地方の農村ドマのスーク風景



写真12

アシール地方の農村ドマのスーク風景。
スーク（野外市場）はドマの城郭内の広場で毎週火曜日に開かれる。 近隣のバドウィン達の
社交場として一日中賑わっている。

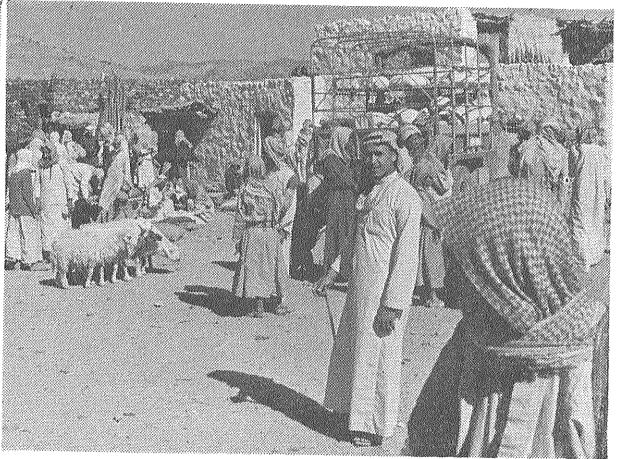


写真13

スーク（野外市場）はドマの城郭内の広場で毎週火曜日に開かれる。 近隣のバドウィン達の
社交場として一日中賑わっている。

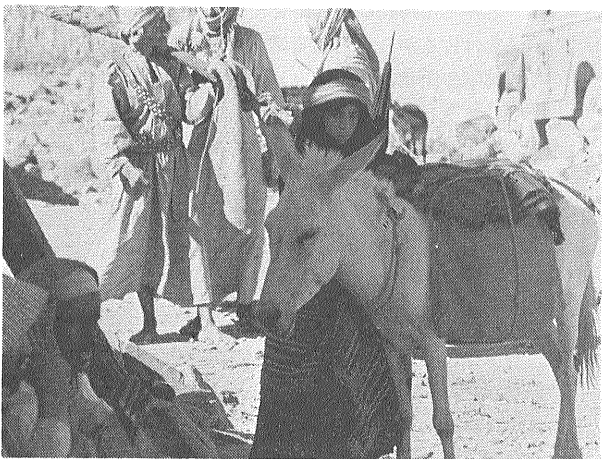


写真14 スークにろばを連れて買物に来た少女。 アシール地方では娘は頭に
黄色や赤の鉢巻をし 腰に色彩豊かな腰巻をし 既婚者と異なっ
た服装をしている。

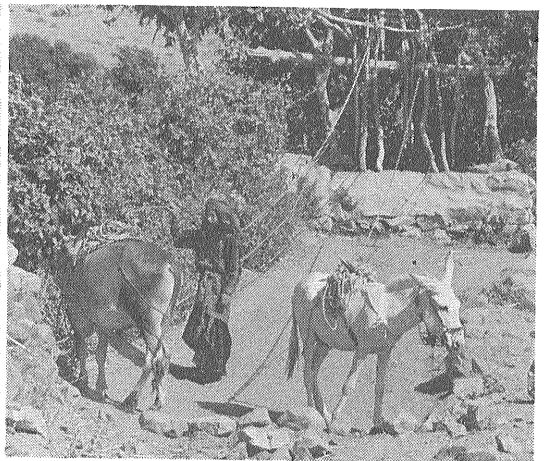
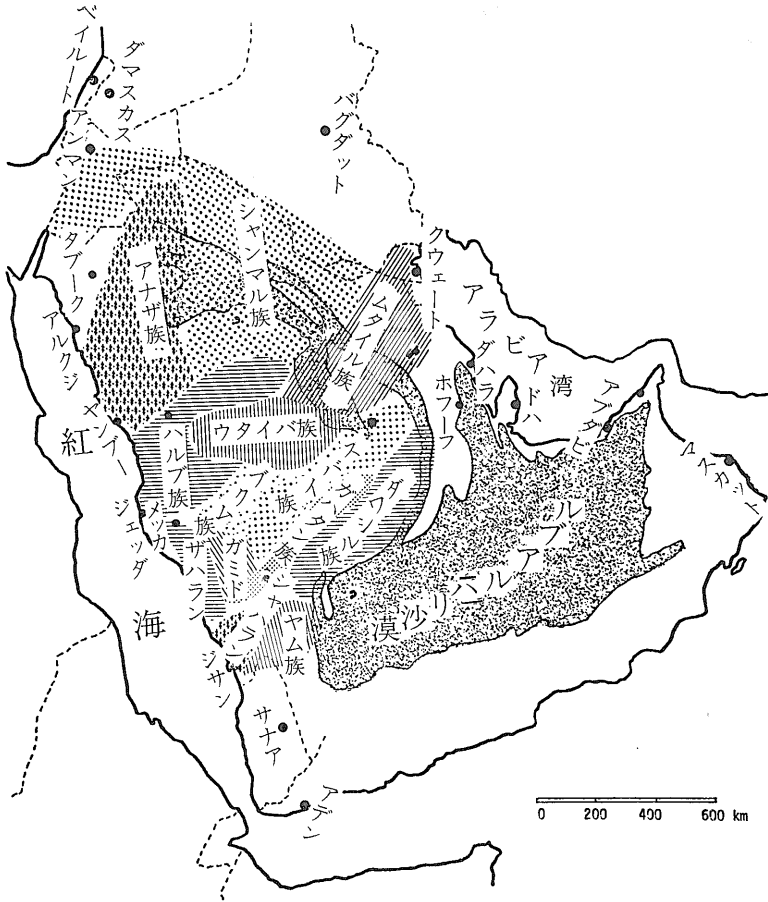


写真15 アシール地方の井戸。 水汲みは娘達の仕事で こぶ牛と
ろばをたくみに御して水を汲む。



第1図
アラビア半島の遊牧部族民の分布
(ARAMCO HANDBOOK 1968より)

南部の山岳地帯 アシール地方のベドウィンとは 性格も気風も風俗も雲泥ほどにちがっている。 ナジドヒジャーズ北部では夏季には日中天幕内の日陰で45°から50°Cにもなり羊や山羊の牧草は全く枯れてしまうので この地域のベドウィンは ヨルダンからシリア国境付近まで牧草を求めて移動し 雨季の冬に牧草の萌えだしたふるさとナジドやヒジャーズ北部に戻ってくる。これらのベドウィン達の遊牧移動(ルハール)の距離は300キロを超える場合さえある。ヨルダンのベドウィンの主流であるシャムマル族(Shammari) ムタイリ族(Mutayri) ウタイバ族(Utaiba) ハルフ族(Harbi)などが ルハール距離の大きなベドウィンで ラクダと羊 山羊などを家畜として砂漠と草原で遊牧し 家畜の毛皮 乳酪品をナツメ椰子や穀物や衣類と交換して生活し 極めて貧困であったため アブドル・アジャーズ王がサウジアラビアを建国し略奪と部族闘争を厳重に禁ずるまで これら部族は“砂漠の海賊”といわれて恐れられていた。 現在リヤド ジェッダなどの大都市のタクシ

一の運転手や大型トラックを転がしているのは ほとんどムタイリかウタイバ達でラクダを車に乗りかえたわけである。 最近10年間のベドウィン定着政策と教育投資により かなりの補助金がこれらベドウィンに支給されているので 次第に豊かになり ラクダはダットサンのピックアップトラックにかわり ランプの代りにホンダの小型発電機で電燈をつけている。 これらの部族は勇猛で困苦欠乏に耐えることができるため多くの青少年は軍隊に入り サウジアラビア陸軍の中核をなしている。

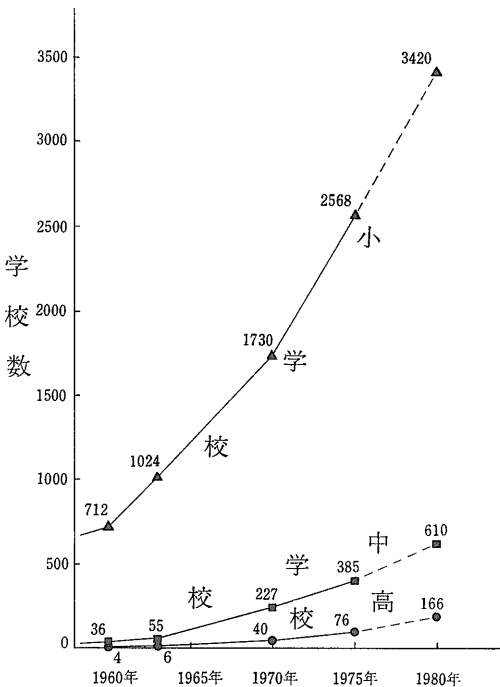
外国人に対しては極めて排他的で 本多勝一著『アラビア遊牧民』に詳しく述べられているように功利的 自己本位である。 これらの部族の女性達は特有のマスクで目鼻を隠し その上分厚い黒いヴェールをかぶっておりわれわれ外国人が近付くと砂や石を投げつけ一目散に逃げる。 このような性格は 長い間牧草を追って毎年数百キロ移動を繰り返し 部族同志の闘争が日常的に行われ略奪を警戒しながら 乏しい食糧を求め歩いてきた習性から生まれたものであろう。

一方 ヒジャーズ南部 アシール地方はアラビア半島の中では降雨に恵まれ ベドウィン達の多くは村落をつくって農耕定着し 一部が羊や山羊を追って村の周辺10キロ程度を牧草をさがして移動するにすぎない。これらのベドウィンはナジドやヒジャーズ北部のベドウィンにくらべるとかなり裕福で 性格も開放的で穏やかでわれわれ外国人とも直ぐ親しくなる。アシール地方では村落ごとに井戸を共有しており村の中心にはモスクと市場(スーク)を開く広場があり 厳重な土壁で囲まれ監視塔が点在して外敵に備えていた。ヒジャーズ南部やアシール地方では 一年中水の流れている川もあり 標高2,000ないし2,500メートルで夏でも涼しく農作物にも恵まれており 他部族の略奪(ガスワ)をいつも警戒しなければならなかったため お城のような村落を築造したのであろう。アシール地方のベドウィン達は現在でもナジドのベドウィンをおそれており 運転手として連れていったウタイピやムタイリ達と余程のことがないと仲良くならないようである。ダワシル族(Dawasiri) ガミド族(Ghamdi) ザハラン族(Zahrani) ヤム族(Yami) シャハラン族(Shahrani)などがヒジャーズ南部とアシール地方に住むベドウィン達であるが ナジドの部族にくらべてはるかに規模も小さく弱少である。アシール地方の女性達は陽気で開放的で ニ・三日フィールドで出会って挨拶をするようになると 彼女らの天幕にお茶に招いてくれるほどである。衣裳も特有のイ

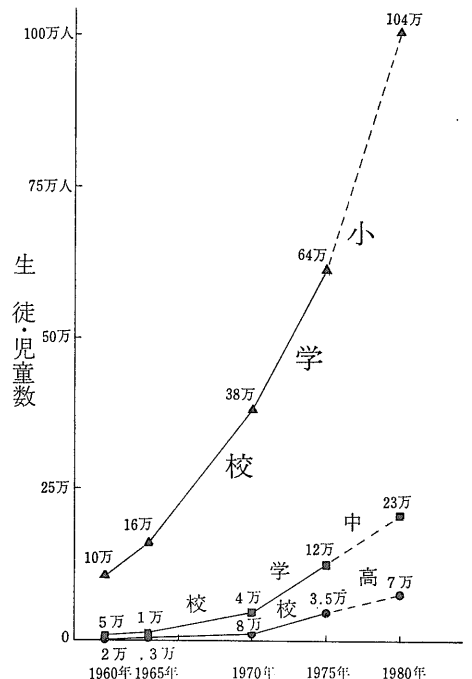
エメン風で色あざやかな鉢巻きをしておりヴェールはかぶっていない。

マディナから来ていた学生のハシム・ハキム君のおじいさんから四・五十年前の話しを聞く機会があったが 当時のナジドのベドウィン達の跳梁は目に余るものがあったようである。各国からの巡礼達は はぐれないように一団となり しかも護衛を雇ってメッカマディナ街道を歩き これ程警戒していても一歩列からはずれると ベドウィン達に襲われて命を失うか拉致されて行方知れずとなることは普通で 拉致された巡礼達は奴隷として叩き売られてしまった。夜のメッカマディナは死の街となり 街には野犬の声とベドウィンの足音ばかりがひびいていた。ただベドウィン達は路上での“おいはぎ”はやるが家の中まで押し込め “強盗”はやらなかったのが せめてもの救いだったそうである。

紅海岸の港町ジェッダは古くからメッカへの入口として栄えてきたがベドウィン達が市内で物盗りを行うとたちまち死罪にするという不律律があったためジェッダ市内(城壁で囲まれていた)では ベドウィン達は大変おとなしくジェッダの夜は大変賑やかだったそうである。メッカへの城門(バブ・メッカ)を一歩出るとベドウィン達の天下なので ジェッダマッカ街道70キロを護衛つき団体でコーランを唱えながら歩く光景は大変壮観だったようで 絵や絨毯の図柄として残っている。アブドル・アジーズ王は建国後 ナジド ヒジャーズ北部の部族の長達に莫大な金貨を与え 略奪と部族斗争を禁じ 回教ワープ派のシャリーアに従うよう厳命し 従わない者達を容赦なく厳罰に処したため 数年のうちに跳梁をきわめたベドウィン達の悪行はかげをひそめた。



第2図 サウジアラビアにおける小・中学校と高校数の増加



第3図 サウジアラビアにおける小・中学校と高校の就学児童・生徒数の増加

センターのベドウィン出身の学生11名のうち8名は古くから村落に定着し比較的裕福なヒジャーズ南部やアシール地方の部族出身（ガハタン族2名 ガミド族3名 ザハラン族3名）で ナジドやヒジャーズ北部の大部族出身（ハルブ族2名 ムマイル族1名）は3名にすぎなかった。しかし最近のアブドル・アジーズ王大学の調査によると ベドウィン出身者の高校進学は年々増えており 特にナジドやヒジャーズ北部の大部族出身の比率が年をおって高くなっているとのことである。

ジャバル・シェイバン 私のサウジアラビアでの初めてのフィールドでジェッダの北北東 200km の北サムラン地方の鉱化帯にあり この国で初めて菱亜鉛鉱（Smithsonite）が鉱床露頭から発見された旧鉱山である。ジェッダからマディナ街道を北上しトウェルからワジ・シタラの河原を上ってランドローバーで約6時間かかった。この北サムラン地方はハルブ族が住んでおり ワジ沿いのオアシスで定着してなつめ椰子や野菜を栽培している一部のベドウィンを除いて ほとんどのハルブ族はあちこちで天幕ぐらしをし羊や山羊をおっていた。1967年暮この北サムランのワジ・シタラ沿いの小さなオアシス・シャバに寺小屋風の小さな男子小学校が開校し サウジ・アラビア人の校長と4人のヨルダン人とパレスチナ人の先生達が赴任してきた。

校長先生と一緒に来た教育省のお役人はトヨタのランドクルーザーでワジ沿いに点在しているハルブ族のベドウィン達の天幕を訪れて子供達の進学を奨めていた。教室数が二つの石と泥で作られた学校には運動場もなく 小さなオアシスの周りにはなつめ椰子の葉でふいたバラックが十数戸肩をよせあって立っていた。その後毎年北サムラン地方を訪れる機会があり とくに 1971年以降は応用地質学センターの学生達の地化学探鉱の訓練フィールドにこの村の近くを選んだこともあり このシャバ小学校の先生達には色々お世話になった。この小学校の誕生からおいたちをみると 1967年から10年間のサウジアラビアの教育政策の軌跡をみているようで 大変興味深かった。1967年末に児童数25名 先生5名で発足したシャバ小学校は 1971年末には広いサッカー場やバレーコートのある校庭もでき校舎は鉄筋コンクリート三階建ての本建築に生れ変わり 児童数300名 先生は18名に膨らみ 併設の女子小学校の校舎も建築中で 約30名の女子児童は旧校舎に仮住いしていた。学校の周囲には100戸以上の住居が立ち並びすっかり賑やかな村に変貌していた。1967年当時われわれの夫婦として働いたサーレヘ君は 朝夕ダットサン ピックアップトラックでワジ沿いのベドウィン達の天幕をまわって児童達を送迎していた。シャバ村はその後ワジ・シタラ農業灌漑事業の中心となったため

にどんどん大きくなり 1977年には300戸以上の大村落となった。

サウジアラビア第一次開発5ヵ年計画は 中央企画庁(CPO)が国連と スタンフォード研究所の協力を得て計画案をつくり 1970年1月にスタートし1975年に終り 引続き第二次開発5ヵ年計画(1975—1980)が始まった。

ワジ・シタラの農業灌漑事業はこの第一次5ヵ年計画の一環として農業水資源省がはじめたもので 道路をつくり多くの浅井戸を掘り ワジ沿いに耕地を拓げ ベドウィン達の定着をはかるとともに教育省と協力してベドウィンの子弟の進学を促進しようとしていた。

1973年には中学校もでき1976年には卒業生18名のうち5名はマディナ街道沿いのラビー(Rabigh)の高校に進学した。近い将来にはこのシャバ小学校出身のハルブ族の大学卒業生が生まれるはずである。

サウジアラビアの教育計画

1967年から現在にいたるシャバ村の小学校の発展で象徴されるように 最近のサウジアラビアの教育への力の入れようは大変なものである。“人的資源開発費”とよばれる教育予算は第1次開発5ヵ年計画(1970—1975)で 全開発予算の18.1%にあたる約102億リヤル(29億米ドル相当)が使われた。さらに第2次5ヵ年計画(1976—1980)では 第1次5ヵ年計画の総予算(592億リヤル)をはるかに上回る801億リヤル(230億米ドル相当)が教育費として使われている。これは最近莫大な武器購入で名をはせているサウジアラビアの防衛費とほぼ同額で 教育予算の膨大さが想像されるだろう。

第2・3図でみられるようにサウジアラビアでの小・中学校と高校の数と 就学児童生徒数は鰻のぼりに増加し 1980年には全就学児童数に匹敵する104万人が3,420校の小学校に就学できる見込みである。また1960年には全サウジアラビアでたった4校しかなかった高校(生徒数2,000名)が 1980年には7万人の生徒を166校の高校に受入れることが出来そうである。学校の建設と児童生徒の就学は順調に進んでいるが 教師の絶対数が不足しエジプト レバノン ヨルダンおよびパレスチナなどの近隣アラブ諸国からの教師を積極的に輸入している。また大学の定員を大幅に増員して将来に備えている。